

現代日本小説大系

36

新編



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第三十六卷

河出書房版

現代日本小說大系 第三十六卷

昭和二十七年八月十日 初版印刷
昭和二十七年八月十五日 初版發行

定價 貳百參拾圓
地方定價 貳百四拾圓

代著者

谷崎 精二

發行者

河出 孝雄



編集者

片岡 良一

印刷者

小田 茂作

發行所

東京都千代田區
神田小川町三八 株式會社

河出 書房

振替東京一〇八〇二番
電話神田(25)三二七四番

東京日本印刷株式會社印刷

目次

加能作次郎

世の中へ

一

谷崎精二

地に頼つて

五

淡雪

六七

義母

八四

相馬泰三

夢

九六

六月

一〇一

破談

一七

素木しづ子

松葉杖をつく女……………二五

水野仙子

十六になつたお京……………二五三

輝ける朝……………二五八

加藤武雄

闖入者……………二六六

郷愁……………二七六

鳴咽……………二八〇

吉田絃二郎

島の秋……………二八四

清作の妻……………二九六

彼岸詣り……………三三

岡田三郎

惨めな戯れ……………三八

熊……………三九

尾崎士郎

河　　鹿……………四六

鶺鴒の巢……………五〇

佐佐木茂索

曠　　日……………五六

魚　の　心……………六五

藤森成吉

雲　　雀……………七五

娘……………三六

舊先生……………二〇〇

解 說（片岡良一）……………三二

加能作次郎

世の中へ

私が伯父を頼つて、能登の片田舎から獨り飄然と京都へ行つたのは、今から二十年前、私の十三の時であつた。

私の父は京都生れの者で、京都には二人の兄と一人の姉とが居た。長兄は本家の後を嗣いで萬年寺通に佛壇屋をやつて居たし、次兄は四條橋畔に宿屋と藥屋とをやつて居り、姉は六條の本願寺前に宿屋を営んで居た。そして私の姉は、その三年前、十三の年に京都へ行つて、六條の伯母の家におちよばとなつて居た。私は四條の伯父の許へ行つたのであつた。

四條の伯父は其の年の初夏の頃初めて能登へ來て寄つた。病後の保養かたゞ加賀の山中温泉へ、妻と二人連れでやつて來た序に、自分だけその弟なる私の父の許へ立ち寄つたのであつた。

贅澤で我儘で氣むづかしい都育ちの伯父の氣質としては、迥も堪へられさうに思はれない汚ない、不自由な、怪びしい漁村ではあつたが、空氣がよいのと、新鮮な魚が多いのとの爲であつたか、伯父は彼は一月ばかりも滞在して行つた。我が儘の言ひ放題を言ひ、田舎で許す限りの贅澤の仕放題をして――。

その時私は病氣で寝て居た。左の膝の關節が痛み、筋が突張つて足が伸びず、歩行も出来ないほどだつた。私は五日か七日隔き位に父に背負はれて二里餘り離れた或る村の醫者へ通つて居たが、醫者は關節炎だとか云つて、ヨヂュムチンキか何かを塗つて呉れたりして居た。

「こんな田舎の醫者なんかあかへん。少し快うなつたら京へお

來なはい。伯父さん病院入れて癒したるよつて。」

或時斯う言つた伯父の言葉が、不思議に私の頭にこびりついた。伯父が歸つて行つた後にも、私はこの事ばかり思つて楽しんで居た。それは病氣をなほして貰ひたい爲ばかりではなく、他にも理由があつたのである。

私は、伯父は餘程の金持だと思つた。それらしい噂は前から父などからも聞いて居たし、伯父自身が、得意らしく誇らしげに話す京都に於ける豪奢な生活振りからも想像された。家は京都では第一の眼拔の場所にあつて、三階建の大きな建物で、奉公人の十人近くも使つて盛大に商賣をして居ること、店の方は番頭に任せて、自分は妻君や妾やを連れて毎日の様に物見遊山に出て歩いてるといふこと、一寸外出するにも、千圓近くの金目のものを身につけて出ること、浪華亭の旦那といへば京都で誰知らぬものもない位だといふこと、其他之に類する種々のことを話して居た。殊に山中の温泉に居て、西瓜が食べたくなつて態々京都から大きな新田西瓜の初物を取り寄せたといふ話や、村へ來た時百人餘りの小學校の生徒全部へ土産として饅頭を贈つたことや、馬に乗りたくなつたとて、金はいくらでも出すから馬を買つて來いと云つて、私の父をてこずらせたことや、(私の村は漁村なので、馬は一頭も飼はれて居なかつた)さういふ馬鹿氣な贅澤振りは、幼い私をして只わけもなく「豪いもんやな!」と驚嘆せしめた。そして、この伯父を頼つて行つたならば、私が家が貧しい爲に到底不可能の欲求として、斷念めながら憧れて居た中學校へ出して貰へるだらうと思はしめた。その上、私は生れた年に母を失ひ、間もなく繼母の手に育つ

たのだが、繼母には其時すでに三人の子供が出来て居て、私との仲が兎角面白くなかつた。私が居る爲に、家の中がいつも陰氣で濕つぽく、父までがどんなに人の知らない心の苦勞をして居たか知れなかつた。私は子供心にもそれを感じながら、味氣なく淋しい日を送つて居た。殊に私の爲に唯一の味方であり、不幸な境遇を共に相憐み合つて居た姉が、京都へ行つてからは尙更だつた。私は父の側を離れるのが此上もなく悲しかつたけれど、「自分さへ居なければ」といふ氣が始終して居た。自分も京都へ行かう、その方が父の爲にも私自身の爲にもよいと思つた。その矢先へ伯父が来て、私の心に火をつけて行つた。そして或る意味に於て私に將來の保證を與へて呉れたやうなものであつた。私は病氣がなほつたらすぐ逃げ出して行かうと密に決心してゐた。

それは舊曆の盆の十五日の午近い頃であつた。父も繼母も寺へお詣りに行つて居た留守の間に、私は小さな風呂敷包を一つ抱へて、干魚を積んで加賀の金石まで行く小さな漁舟の一隅に身を寄せて、また再び相見えようとの豫想もなく、故郷の山河に別れを告げた。

この事は父だけが知つて居た。私は伯父が歸つた後に、間もなく病氣も快くなつたので、そつと父に私の希望を述べたのであつた。

「さうか、そんなら行つて見るかいの？」

父は大きな溜息を吐いた後に、一寸思案にくれた様な面持で、態と私から眼を避け、四邊を憚るやうに見廻しながら言つた。

私は首肯いた。

「行つて見ようともたら行つて見さつしやい、姉も居るさかい、淋しいこたないやらう。」

父は最後の許しを與へるやうに言つたが、その聲はうるみ、其の眼には涙が浮かんで居た。私と別れることよりも、私が京都へ行くことに決心したその心根を察して、いちらしくなつたのであらう、父はその大きな筋張つた、節くれ立つた手で顔を掩うた。

いろいろの事情があつたので、前以て父と謀合せて置いて、繼母の手前はその頃村の青年達の間によく流行つた様に、私が全く誰にも祕密に逃げて行つたものゝやうに繕つたのであつた。

「さあ、もうこれで會はんぞ！」その日の午前の中、繼母がお寺詣りの着物を、平生預けてある本家の土蔵へ取りに行つてゐる留守の間に、父は薄暗い佛間へ私を呼び、懷から旅金の入つた紙包を出しながら言つた。そして佛壇の方を目で指した。私は父の意味することをそれと察して、佛壇の前にきちんと坐り、恭しく亡き母の位牌に別れの禮拜をした。

「そんなら息災ね御座いの、氣イ悪せんとな。(病氣になるなどいふ意)」

父はまるで隣室に人でも居るかの様に、かすれた聲で私語いた。

「あい——。」

私は口の中でさう言つて打伏した。悲しいとも淋しいとも、何とも例へやうのない心持であつた。

「舟の案には工合よう言うて頼んどいたさかいの。……」

まだ何か言はうとした時、繼母が歸つて来るらしい氣配がしたので、「さあ早う、それを片付けて了へ。」と眼で金包を指して、「もう、これで會はんぞ！」と今一度繰返し私語きつゝ、てれ隠しに其處にあつた手箒が何かを持つて、用ありげに入口の方へ出て行つた。私は態とそこの經机の前に坐つて本を開いた。

父と母とが出て行つた後に、私はもう一度佛壇に拜をして、それから家を出た。そして濱の方へ行つた。晝と晩との辨當は、舟の船頭が私の分をも特にこしらへて呉れることになつて居た。

舟は岸を離れ、入江を出て、だん／＼村から遠ざかつた。海は穩かで、正午頃の殘暑の陽光がじり／＼と背に熱かつた。顧みると、海岸からすぐ高い崖の樣になつた急な傾斜面の凹みに、周圍を木立に包まれた百戸足らずの家が、まるで小石を擲んで置いた樣にかたまつて居た。其の上へ日光が直射して、所々の白壁などがきら／＼光つて居た。小ぢんまりとした美しい畫の樣だつた。

私の眼には先づ自分の家が指點された。私は誰も居ない空つぽの家の中を思つた。どの部屋もの光景が隅々まであり／＼と見えた。廣間の、夏は塞いである爐の蓋の上に小猫が眠つて居るのまで見えた。此の閑かな空つぽの家を、奥の間の佛壇が留守して居る様に思はれた。私の眼には佛壇の扉の開かれて居る樣も見えた。中扉の青い紗を透して一番奥の掛軸の阿彌陀如來

の像や、その前に供へた御飯や、花瓶や、龜の上に鶴の乗つて居る蠟燭立てや、輪燈やが眼に入つた。それらの眞鍮製の佛具は、つい二三日前お盆だといふので私が磨いたので、びか／＼光つて居る――。

私は此の佛壇の中に、幾つも生きた靈が住つて居る様に思つた。そして、今誰も居ないのを幸にお伽噺の中などに出て來る小鬼の様な恰好をして、廣間や納戸や勝手などへ出て來て、びよんびよんと飛び跳ねながら遊んで居る様に思はれた。そして其の樣子があり／＼と眼に映つた。

私はまた、小さな家々の間に特に際立つた高い大きな寺の本堂の屋根を見た。そこには今説教が始まつて居る筈だ。老若の男女が御堂一ぱいに詰つて、熱心に説教を聽いて居る。その中に、鐵色の肩衣をかけた私の父もあつた。父は恐らく説教も耳に入らないだらう。父は折々後を向いて沖の方を眺めるに違ひない、そして穩かな、日光に光つた海を沖へ／＼と駛せて行く此の小舟の中の私を思ひやつて居るであらう。……私は父が御堂から抜け出て、縁側に立ちながら此の舟の帆影を眺めて居はしないかと思つた。

「お、今出て行くわい。それでも風ぎで好かつた。」

かう呟きながら空模様を見上げて居る。瞳をこらすとその姿が見える様な氣がした。

金石まで海上二十里餘あつた。私は翌る日の未明に其處の砂地を踏んだ。故郷の村は遠く雲烟の間に、かすかに一抹の墨繪の岬になつて見えた。岬の端に半分海の中へ入つて聳えて居る富士形の山は村から三里程奥の××山だ。

私は船頭さんに伴はれて鐵道馬車で金澤まで行つた。船頭さんは私を停車場まで送つて來て呉れた。そして切符を買つて汽車に乘せて呉れた。その頃北陸線の汽車は金澤迄しか通じて居なかつた。

愈々一人になつた。もう父のことも村のことも胸に浮ばなかつた。只現在と行末の不安のみが心を去來した。汽車はその日の夜半京都へ着く筈だつた。

私は車臺の隅つこに小さく縮こまつて居た。汽車はあまり混んで居なかつたが、車中の人は、皆な怪訝さうに私をじろ／＼と眺めた。私は何となく心が慄へた。皆拘摸ではないかと思つた。

「拘摸に金を取られまいぞ。」斯う言つた父の言葉が思ひだされた。父は一年おきか二年おきには京都へ行つた。そして歸つて私達に京都の話をする時にはいつも拘摸の話をして聞かせた。私達も好んで其話を頼んでして貰つた。父は私達を喜ばせる爲に人の話などをその儘したのであらうが、私はそれを信じて居た。私は汽車の中でも京都の町でも拘摸で一ぱいになつて居る様に思つて居た。汽車に乗る時、船頭さんが、私の隣の座席に腰かけた四十餘の男の人に、私のことを頼んで呉れたので、其人は時々私にいろ／＼のことを尋ねたり、親切に世話して呉れたりしたが、私は却つて彼を恐れた。私は七つの時田舎の叔父と京都へ行つて迷兒になつた時、親切さうに宿へ送り届けてやると言つて、私を町中引つ張りまはしながら、終ひに私の羽織を脱ぎ取つて行つた人のことを思ひ出して、この人もそんな種類の人ではないかと疑つて疎に口もきかなかつた。私は時々

内懷へ手を入れて、金包に手を觸れて見た。

二

京都の停車場へ着いたのは、夜の十二時近くであつた。しかし姉の行つて居る伯母の家は宿屋なので遅くまで起きてあることを知つて居たので、私は割合に平氣であつた。此の前、七つの年に來た時のことをうる覺えに覺えて居て、その家が停車場から近いことや、どの邊にあるかといふことも大體見當がついて居たが、私は父に注意された通り人力車に乗つた。人力車を雇ふことも知つて居た。

さすがに夜更のことゝて、停車場前の宿屋が二三軒起きて居たばかりで、街は暗く淋しかつた。今、汽車を下りた人達の乗つた人力車が、後先にがら／＼（その時分にはゴム輪の車はなかつた）と走つて居る他人通りとはなかつた。

伯母の家は、本願寺前でもかなり格の高い宿屋なので、鍵屋といふ屋號を言ふと、車夫にすぐ分つた。車はほんの一寸の間電車の線路に沿うて走つてから、右の方に曲つて居る線路に分れて眞直に走つた。といふよりは、のろ／＼と並足で歩いて居た。私は子供で而も田舎者であるので、車夫が馬鹿にして居るのだと心の中では少しむつとして居た。

本願寺前に近づいた時、車夫は一層足を緩めた。そして何處の者だと車上の私に訊いた。私は正直に言へばよかつたのだが、能登の者だといへば、車夫が田舎者だといふので尙馬鹿にするだらうと考へたので、

「金澤市のもんや。」と、小賢しくも都會人であるぞと深く印

象させる爲に特に「市」といふ所に力を入れて言つた。

「鍵屋さんへ行つたかて、もう起きてはらしまへんよつて、何處か外のいゝ宿屋へ案内しまほか? そして明日の朝早く行きなはつた方がえいやおへんか?」

少し行つてから車夫は立ち止つて車上を顧みて言つた。私は、車夫がこんなことを言つて、私をだますのだと疑つた。停車場の車夫と、附近の宿屋との間に結ばれて居る宿引的の關係を、私は父などの話で聞いて居たが、その時ふと其のことが頭を掠めたのであつた。私は心に警戒した。

「えんや、家の者なんか、いつも行くのやさかい、よう知つてるのや。」と私は大人らしい口をきいた。

「さうやかてな、今時分行つたかて起きて呉れはらへんにきまつたるぜ。」と車夫は言つた。

私は益々車夫の心を疑つた。そして飽くまで主張したが、實際その邊は宿屋町だけと起きて居る家は一軒もないので、少からず心細かつた。

「そんなら、行つて起こいて見て起きて呉れはらへんだら、外へ連れてつて上げまほ。」

車夫は一人心できめて居るかの様に言つた。私は全く不安に慄へさへした。

鍵屋へ行くと、案の定、表戸が堅く閉されて居た。車夫は、私を車から降しめせず、駄目なことは初めから分つてると言はんばかりに、片手で梶棒を支へ、片手で、どん／＼と戸を叩いた。が、返事は容易になかつた。

「ほんまやらう。どない叩いたかてあかへん。」

車夫はそれ見たことかと言はんばかりに私を顧みながら言つた。私は氣が氣でなく、もつと叩いて呉れと頼んだ。車夫は更に強く叩いた。

「どなた?」と中から囁かれた女の聲がした。私は一瞬間ほつとした。

「金澤のお客さんどす、開けてお呉れやす。」と車夫は叫んだ。私ははつと思つたが、もう取り返しがつかなかつた。すると暫く經つてから、「お斷りどす。」と、前よりも大きな聲がはつきり聞えた。

之を聞くと、車夫はもう私を引き戻さうとする素振りを見せた。私は慌てゝ車を止めて飛び下りた。そして、

「能登のものです。浅次郎です。」と大きな聲で父の名を呼ばはつた。

「何や? 能登の浅はん?」と、驚き怪しむ様な調子で家の中の聲が言つた。私はそれを伯母だと思つた。それでやつと胸を撫で下ろした。

「えい、浅次郎の子です。」と、私は一生懸命に、併しおど／＼しながら言ひ直した。

車夫は呆氣に取られて、何かぶつ／＼呟いて居た。私が金澤のものだなどと嘘を言つたのを變に思つたのであらう。

やがて重々しい音を立てゝ表戸が開かれ、中の方からさつと明りがさした。私は一二歩思はず身を避けた。そしてそこに寢衣姿の伯母を見た。私は首を垂れて立ち竦んだ。

私が先刻言ひ直したのが聞えなかつたのか、てつきり私の父だと思ひ込んで居たらしい伯母は、彼女の弟の代りに、そこに

小さな子供の私が、物貰ひか何かの様に立つて居るのを見て、
「あれ、まッ、おまはんかいな！」と怪訝さうに言つた。

「えい。」と私は口の中で答へながら側へ近寄らうとすると、
伯母は再び家の中へ入つて行つて、

「これ、これ、お君、お君。」と、私の姉を呼び起して居た。
そしてまたこちらへ出て来て、私を招き入れた。

私はおづ／＼と後について中へ入つた。

「あれ、恭やかいい！」

姉のお君は、しどけない寝衣姿のまゝに飛び出して来て、眠
さも忘れたやうに眼を丸くしながら、頓狂な聲で叫んだ。

「どうしてお來なはつたんえ？ 逃げて來なはつたんか？」

私は只恥しさうにや／＼笑つて居た。

「それでも、まあ、よう一人で來れたえな、豪いな。」

姉は續けざまにさう言つた。そして懷しさうに、にこ／＼笑
ひながら私の顔をしげ／＼眺め入つた。彼女はもうすつかり垢
抜けのした娘になつて居た。

「よう、お來なはつたえ、なあ、」と伯母も口を添へて、「車夫
が金澤のお客さんや言ふよつてな、妾お斷りどす言ふとな、此
の子が能登の淺次郎や言ははるんやらう、變どしたけどな。」
と姉に説明した。

「へえ、そんなこと言うたんですか？」

そこで私は簡単に事情を打ち明けた。

「それでも、ようまあ、氣が利かはつたえな、小さいのに。」
と伯母は感心したやうに言つた。

「矢つ張り男の子えな。」と姉も喜ばしさうに言つた。「この子

は小さい時から賢い子どしたよつてな。」

丁度そこへ夜啼餛飩屋が通り合はせたので、伯母はそれを呼
び入れて、私と姉とに餛飩を取つて呉れた。

それを食べながら、私は聞かれるまゝに故郷の話や、上京し
た理由や、途中のことなどを簡単に話した。そして其夜は、外
の下女などの寢て居る蚊帳の中へ入つて姉に抱かれて寢た。

翌る日は、姉に連れられて、朝から東山の方へ見物に出掛け
た。近くの大佛、三十三間堂あたりから順々に、清水、高臺寺、
祇園、圓山、知恩院、大極殿、それからずつと疏水の方まで歩
いて行つた。

姉のお君は、私の來たことを心から喜んだ。そして如何にも
姉らしい情愛を示しつゝ、私をいたはつたり慰めたり庇つたり
しながら、物馴れた老成た態度で案内して歩いた。併し私達は、
名所舊蹟を見物するよりも、かうして二人連れて互に身の上話
をしながらか歩いてゐるのが楽しかつた。孤兒の子供の姉弟が知
らぬ他郷に漂浪ふやうに――。

話は盡きなかつた。父のこと、伯母のこと、二人とも、もつと
子供と一緒に田舎に居た頃のこと――村の知人のこと、昨夜殆
ど眠らずに物語つたそれらの話を、その時もまた繰り返して、い
つも新しい興味をそゝり、懷しさを増すのであつた。

「お父つあんな淋しかるえな。」

こんなことを姉は幾度言つたか知れなかつた。私が父と別れ
る時のことを話した折には、彼女は、父の淋しさうな姿が見え

ると言つて泣いた。そして路傍に立ち止つて私を抱き締めなどした。

「能登へ行つたかて、お母さん居らへんし、妾等は京の者になろえな。」

こんなことも姉は言つた。

歸りには京極へまはつて、見世物を見たり、善哉を食べたりして、日暮に六條の家へ歸つた。そして、晩飯がすんで、姉の手が空いてから、私は四條の伯父の家へ連れられて行つた。

初めて電車といふものに乗つた。四辻へ来る毎に、赤い信號旗と火事提灯を持つた小僧が、通行人を警戒する爲に、運轉臺から飛び下りて、馬車の馬丁の様に先走りするのが、その時の私には物珍しく映つた。

四條小橋際の停留場で下りた。伯父の家はすぐ近くにあつた。四條大橋の西詰の角の三階建の大きな家がそれだつた。四條通りの方に面した例の藥屋の店の前を態と通り越して、橋の上まで行つて、遠くから姉はそれを指して眺めさせた。私は胸を轟かせながらその建物を見上げた。四邊に一際高く、二階にも三階にも明るく點された大きな四角な建物は、まるで城の様に私の眼に映つた。橋を中心にしたその邊の街は、京都で最も美しい賑かな街の一つであつたが、その灯の街とも人の街ともいつた様な四邊の美しさも賑はしさも、私の眼にも耳にも入らなかつたほど私の心は亂れて居た。

「賑やかですやう、どうえ？」

私が黙つて居るので姉はさう促すやうに言つた。姉は、都の夏の夜景の美しさや繁華さが、田舎者の私を驚嘆させたに違ひ

ないと思つたのであらう。態々橋の上まで連れて行つたのも、私にそれを見せる爲だつたに違ひない。そして私の驚異と讚嘆とを買つて得意を感じたかつたに違ひないのだつた。

「つい此間まで、この河原に納涼がおして、ほんまに綺麗としたがな、こないだ大水が出てな、皆流されて、まだ後があんじようならへんので、淋しんどつせ。」

しかし、私は顧みもしなかつた。私の心は、今夜からこの眼の前に聳えて居る大きな家の人となり、多くの見知らぬ人々の間に起臥するのだといふ漠然とした不安や恐怖やで一杯になつて居た。

「これから世の中へ出るのだ。どんな運命が自分を待つて居るだらう？」

子供の私には勿論そんなはつきりした意識はなかつたが、詮じつめればそんな風な氣持で一ぱいになつて居たのであつた。

數分の後、私は姉の背後に身を隠すやうに寄り添ひながら伯父の家へ入つた。先斗町並びの廣い玄關口の一方の柱には、斜に描いた瓢箪の下に旅館浪華亭と書いた瀟洒な掛行燈が懸けてあつた。足の裏のむづ痒くなるほどつる／＼した廣い式臺に立つて玄關正面の大きな姿見の中に菱種のやうな小さな自分の姿を映し出された時には、ぞつと身の冷たくなるのを感じた。

伯父の居間は宿屋の方の帳場と藥種を賣つて居る店との間にあつた。唐筵を敷きつめた八疊の室の眞中に寢床を敷いて、その上に伯父は平袖の寢衣を着、骨だらけの瘦せた胸をはだけ、大きな胡座をかいて、三十位に見える色の白い美しい丸髻の女

に肩を揉ませて居た。そして其側に四十近くのこれも丸髭に結つた、圓顔の、色の稍々黒い、朴訥さうな女が、長煙管で煙草を喫つて居た。

私が今夜來ることは、晝間私達が見物に行つて居た間に、鍵屋の伯母が來て知らせてあつたので、私達が入つて行くといふと

「この子さんですか、ようお來なはつたえな。お君さんの弟さんですか。」と年増の方の女が丁寧な口調で言つた。

「え、こんな坊ンが出て來よつたよつてな。どうぞ世話してやつてお呉れやす。」と、姉は大人びた口調で言つた。

「ふん。」と其女は獨りうなづいて、「まだ小きうおすえな、幾つどす?」

「十三どす。十三どすけれどな、この子は小さい時から病氣ばかりしてはつて、よう太れへんのどつせ。妾が田舎に居た時分から、こんな顔色の悪い小さい子どしたんえ。」

かう姉はべら／＼と説明して、ふと氣がついた風に、

「これ、伯父さんにも伯母さんにも挨拶おしんか。」と私を顧みて叱るやうに言つた。そして、「まだ何にも知らへん田舎者どすよつてな、叱つて使うてやつてお呉れやす。」と皆に向つて言ひ足した。

私は黙つたまゝ頭を下げた。

「すぐ馴れはりますえな、善い丁稚はんどすがな。」

此時肩を揉んで居た女が口を挿んだ。

伯父は氣分でも悪かつたのか、始めから氣むづかしい苦りきつた顔をして、太い銀の煙管で力強く吐月峰を叩きながら、時

時私の顔を睨めつける様に見て居た。まだ四十を越して間もないのに、齒が上下ともすつかり抜けて兩頬が深い穴の様に落ち凹け、皮膚のたるんだ脂肪氣の抜けた黒味がかつた顔に、二つの大きな眼をぎろ／＼させて居る形相は恐しかつた。彼は私に、「病氣は快くなつたんか?」と一言訊いたばかりで、「よく來たな」とも言つて呉れなかつた。それは如何にも冷やかな、まるで道楽息子でも戒めて居る時の様な嚴めしい態度であつた。私は伯父が田舎に來て居た時分のことから推して、もつと温かな優しい伯父を豫想し、その庇護を求めて來たのであつたが、今この冷嚴な彼の態度に、少からず失望し且つ心細く感じた。

「能登の伯父さん、お達者ですか? 此の前はな、家の旦那はんが行かはつて、えらい厄介おかけやしたえな。」と肩を揉んでゐた女が續けてお愛想を言つた。

私は此女が伯父の妾だと思つた。妻君でないといふことは、何の理由もなしに只さう思はれた。彼女は今一人の女よりはずつと若く且つ美人で、態度や容姿が粹であつた。面長で、鼻がつんと高く、頬がつや／＼して居た。けれども年増の女に比べると優し味が少い様にその時私に思はれた。

こんなお目見えの様なことが濟んでから、私は再び姉に連れられて程遠からぬ京極の方へ夜の賑ひを見物に行つた。

旅の疲れと睡眠不足と、それに今日は朝から歩き廻つたので、私は非常に疲勞を覺えて居た。二三日來の異常な精神の昂奮と、神經の緊張との爲に漸く身體を保つて居たが、ともすれ

は難番の中にもでもふら／＼と倒れかゝるやうなことがあつた。

私は休息と安眠とに渴えて居たが、それは許されなかつた。伯父を始め、側に居た女達も、私の姉も、私に見物に行くことを勧めた。之は彼等の善意から出た親切であつた。疲れて居るだらうから、早く寢ろといふ代りに、彼等は、田舎から来て見物したからう、今晚だけ暇をやるから遊んで来いといふ風に言つて呉れた。私はそれを斥けて、自分の欲する儘に振舞ふこと、例へば何處かの部屋の隅にでも一人寢るといふ様な我儘を言ふだけの親しみをそれらの人達に對して持つて居なかつた。私は厭な仕事を命ぜられて厭々ながらそれをしなければならぬといふ様な氣持で姉と一緒に掛け出した。

「睡たいし、疲れたさかい寢る。」

例へばかう私が言ふと、

「おう、寢よ、寢よ。」

かう甘えさせて呉れる人が欲しくてならなかつた。

姉は一向そんなことに氣が附かぬものゝ如くであつた。彼女は私に賑やかな美しい京の街を見せたい腹もあり、また自分自身も放たれた一夜を、享樂したのであつたらしい。で、彼女は、私が大儀さうに、また厭々らしく彼女の後について行くのを不満に思つたらしく、時々「早くお來なはんか!」と叱る様に言つた。

宵の京極は人の渡でこね返されて居た。そしてその明るい眩しい灯の光は、私をしてその疲れた眼を開くに堪へざらしむるほど刺戟が強かつた。眼瞼がちく／＼と刺される様に痛く、身體がふら／＼して、人にぶつかつてばかり居た。私は姉が兩側

の飾窓の前に立つたり、見世物の看板を眺めながら立つて居たりするのが、憎らしく自烈たくなつた。併し姉を促して歸らうとするにも行く所がなかつた。到頭堪へられなくなつて、歸らうと言ふと、姉は眉をひそめながら、

「歸つたかて、おまはん、寢られへんやおへんか。浪華亭はんはな、遅まで起きてはるよつてな。十二時迄、店しまはらへんえ。」と怒つた様な調子で言つた。

私は當惑した。これから歸つて伯父やその他の人々の前で、あの痛い唐筵の上に窮屈にきちんと坐つて、無爲と戰つて居ねばならぬことが、恐しい刑罰を課せられる様に堪へられぬものに思はれた。

「あゝ、弱つたな!」

私は泣き出しさうに嘆息した。

「そんなら、斯うしまほ。寄席へ入つてな、妾落語聞いてるよつて、其の間おまはん、そこで寢なはい。は、ねたら起したるよつて。」と姉はいふ事を思ひついたといふ風に言つた。

私はそれに従つた。

再び姉に送られて伯父の家へ歸つたのは十一時少し過ぎた頃だつた。

「今晚だけはお客さんにしてやるが明日から丁稚やぜ。」

かう伯父に言はれて、私は間もなく二階の客間へ導かれた。姉は其家の女中かなんぞの様に、私の爲に床をのべて呉れて、暫く病人の看護人のやうに枕元に坐つて居たが、やがて歸つて行つた。朝早く起きることや、よく家の人達の言ふことをきいて働けといふことなどをいろ／＼教訓して。それからあの年増